

『にぎりえ』と内田魯庵訳『罪と罰』…お力・ラスコーリニコフの表現比較

木村 勲

神戸松蔭女子学院大学文学部

はじめに

『にぎりえ』（一八九五年発表）と『罪と罰』（一八九二年邦訳）の叙述にはイメージ的に重なるところがある。ふと嫌気がさした売れっ子酌婦のお力が客を放り出して街裏の闇を寂しく彷徨する場面（五章）と、例の質屋の金貸し老女殺しの翌夜におけるラスコーリニコフのネバ河畔わき道でのそれ（原著第二編の二）である。後者の前者への影響に違いないのだが、取り込みつつ新たな文学世界を創る樋口一葉（一八七二―一九六）の凄みを実感させるところだ。該当部分に収斂する形で分析を試みたい。なおここでいう『罪と罰』は一葉が読んだ内田魯庵（一八六八―一九二九）の初訳本（巻之一と巻之二の二分冊＝原作のちょうど半分まで）を指すことを断っておく。

訳者前書きとして「英譯本（ヴ井ゼッテリイ社印行）より之を重訳す」と記したこの魯庵本が、北村透谷・島崎藤村ら文学青年に衝撃を与えた事実があり、そのことは日本近代文学の成立にかなり重要な意味をもったとわたしは考えている。彼らは評論という形で受けた衝撃を語ったのだが、当時なお戯作調作品が幅をき

かせるなかで、いち早く近代的心理小説として結実させたのが一葉のこの作品なのである。「巻之二」（老女殺人が軸）が出た一八九二（明治二五）年十一月というのは、一葉初期の転機とされる『うもれ木』が雑誌に連載されている時（三回）であった。激しい怒りが描かれた。寂と怒は一葉のいわばキー概念である。

一 お力とラスコーリニコフの闇夜の路地彷徨

『にぎりえ』第五章。七月一六日、つまり十六夜の月光のもと店々は繁盛している。同僚たちの生活の嘆きを聞かされた後、お力は仕事の席に着くが……まわりつく客のお追従にふと嫌気がさす。「あ、私は一寸失礼をします、御免なさいよ」と三味線を置いて立つと、店口から下駄を履いて「筋向ふ横町の闇へ」姿を消してしまふ。以下やや長きに渡るが直接引用しておく。

お力は一散に家を出て、行かれる物なら此ま、に唐天竺の果までも行つて仕舞たい、あ、嫌だ嫌だ嫌だ、何うしたなら人の声も聞えない物の音もしない、静かな、静かな、自分の心

も何もぼうつとして物思ひのない処へ行かれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情けない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あ、嫌だ、と道端の立木へ夢中に寄か、つて暫時そこに立どまれば、渡るにや怕し渡らねばと自分の謳ひし声を其ま、何処ともなく響いて来るに、仕方がない矢張り私も丸木橋を渡らずはなるまい（父も祖父も踏み外したわが宿命を思えば）……為る丈のことはしなければ死んでも死なれぬのであらう、情ないとても誰れも哀れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へば商売がらを嫌ふかと一ト口に言はれて仕舞、ゑ、何うなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆかう、人情しらず義理しらずか其様な事も思ふまい、思ふたとて何うなる物ぞ、此様な身で此様な業体で、此様な宿世で、何うしたからとて人並みでは無いに相違なければ、人並の事を考へて苦勞する丈間違ひである、あ、陰気らしい何だとして此様な処に立つて居るのか……（岩波文庫版三〇〇三一頁、以後引用は本書）

ラスコーリニコフの闇夜の彷徨は魯庵本の第九回（本来は二編二章）に出てくる。老婆から奪って中身も確かめていない小箱や紙に包んだ品物八点を、彼は空き地の堀わきの手ごろな石の下にあった小穴に首尾良く埋め込む。直前に一度はそれをネバ河に捨てようとしたが、「萬一の事があらんよりハ寧ろ寂しい森の中或ハ草叢の下に匿した方が良策かも知れぬ。穴を掘て地中に埋めや

うか！……此工風が最上らしく思はれた」（復刻版巻之一、二一四頁）。河は危険と認識されているのだ（丸木橋の危うさにスライド！）。V……通りに来ると「高塀で圍われた宅地の門があつて、奥深い細徑を入つて右側は立派な四階作りの家の壁で……二十歩ほど行くと頓て塵溜が現れて、又少し下りると多分大工が製車人の仕事場らしき小舎があつて何れも石炭屑の様に黒かつた」。その堀わきに先の石を見つけ上記作業を終了し、「再び町へ出て嬉しさうににっこりした」ところが、「今まで思附かなかつた必要疑問が新たに」起こる。その疑問というのが次の引用であるが、わたしはこの部分がお力が立木に寄りかかりながらした前記自問自答を直接誘引したのだと考える。

『自己の所業ハ充分分別を擬し確實な目的を立てたものか、或いは唯阿呆た根性からちよいと悪さをしたものか。また巾着の中も見ず何を取つたのか、少しも知らずにあるとは何たる事だ。畢竟薄弱な性根から斯うなツたのか。何故また是等の品を一應験めもせず河に投げ込まうとしたのか。それや是やを考へて見ても更に解らぬ。つまり自己ハ病気で、それでこんな考慮を起すんだらうが、衰弱困乏して殆ど何をしてゐるのか自分で少しも知らぬ位だ。昨日も一昨日も全じだ。何うかして少しも早く快復りたいもんだが、若し快復らぬとしたらば如何だらう！ 自己も實に疲勞したなア』（復刻版巻之一、二二六頁）

「自己も實に疲勞したなア」は、一葉描くお力の「あ、嫌だく」

に比すべくもない。硬く稚拙な表現である。もとより後者は強盗殺人犯ではなく、嘆きが自らの出自へのこだわりとなって表出されたに過ぎなかったにしても、である。「疲労したなア」で改行しこう続く（以下傍線引用者）。

段々其處此處と彷徨き廻ッて心を紛らさうとしたが、如何して好いやら更に解らなかつた。すると往日の物嫌ひをする根性が募ッて来て、周囲のものが何から何まで何も彼も強情に、無上に憎くなッて、話し掛けた者を悉く忘れて仕舞はうとした。

傍線部がわからない。特に後の方はまったく意味不明だ。念のため該当部分の米川正夫訳を記しておく。

……ああ、もうこんなことづくしいやになつた！……』彼は立ち止まろうともせず歩きつづけていた。なんとかして氣をまぎらしたいと思つたが、どうしたらいいか、どんなことを始めたらいいか、見当がつかなかつた。ただどうもこうもならない一つの感触が、ほとんど一刻ましに強く強く、彼の心を領していつた。それは目に触れる周囲すべてにたいする、限らない嫌惡の情であつた。それはほとんど生理的なものといつていいほどで、執拗な、いじわるい、憎しみにみちたものである。彼は行き会ふすべての人がいまわしかつた。彼らの顔、歩きぶり、挙動までがいまわしかつた。もしだからが話しかけでもしようものなら、彼はいきなりその男につばで

も吐きかけるか、かみつきでもしたかもしれない……

「往日の物嫌ひをする根性」が米川訳の最初の傍線部「周囲すべてに……生理的なもの」に当たるに違いない。全く理解不能な「話し掛けた者を悉く忘れて仕舞はうとした」は、「つばでも吐きかけるか、かみつきでもしたかもしれない……」であるらしい！ロシア語原書はわからないので、手元のコンスタンス・ガーネットの英訳本（一九一一年初訳）を見ておく。

Good Good, how sick I am of it all !³

He walked on without resting. He had a terrible longing for some distraction, but he did not know what to do, what to attempt. A new overwhelming sensation was gaining more and more mastery over him every moment; this was an immeasurable, almost physical, repulsion for everything surrounding him, an obstinate, malignant feeling of hatred. All who met him were loathsome to him—he loathed their faces, their gestures. If anyone had addressed, he felt that he might have spat at him or bitten him....

念のためベンギン版のデイヴィッド・マクダフ訳（一九九一年）もほぼ同様の細かい心理描写であり、当該部分は「anyone had said anything to him he would quite simply have spat at the person, or bitten him」としつかり「唾かけ噛み付」いている。米川訳はロシア語原典に即していると判断していい。また、魯庵訳本は相当の短縮がなされていることがわかる。具体的に言えば前引用の「自己

も実に疲労したなア」から「段々其處此處と彷徨き……話し掛け
た者を悉く忘れて仕舞はうとした」が計百十一文字であるのに比
べ、米川訳の該当部は三二三文字。三分の一のコンパクト化であ
る。ちなみに原著の第三部までで終わる魯庵本の全文字数が
二四万余であるのに対して米川本の同じところまでは三四万余
だ。つまり魯庵本は米川に比べ三割方スリムである。魯庵がした
のか、ヴ井ゼッテリー社の英訳本がすでにそうだったのか。

二 魯庵本の意味不明の功

加藤百合著『明治期露西亜文学翻訳論攷』（二〇一二年、東洋
書店）によると、この書はロシア生まれの英国作家フレデリック・
ウィッショー（F. Wishaw 1864-1934）の訳でヴィゼッテリー社か
ら一八八六（明治一九）年に刊行されたが、現在原本の探索は困
難なものという。「ウィッショー訳は極めて個性の強いもので、そ
の介在によつて、魯庵は不思議な翻訳底本を訳す必要に迫られて
いたのである。英訳には大小の脱落箇所があり、脱落の大きなも
のは原典の語数にして四百字を超えるようなものもあり、他にも
解釈に影響するような重要箇所を誤訳が存在する」（一六四頁）そ
うだ（魯庵本中にわたしが確認した中抜き省略の例は後述する）。
それにしても先の意味不明を含む引用部分が米川訳の三分の一
という短縮よりはやや異様だ。例示した英文をみても解釈がとく
に難しいところではない。わたしはヴ井ゼッテリー社印行本がこ
こで一定のサマライズをしていた可能性があるにしても、この三
分の一化については魯庵自身によるものと考えたい。彼の感性は

苦悩の彷徨をするラスコーリニコフに「つばでも吐き、かみつく」
という表現を与えることに堪え得なかったのではないか。彼は前
代以来の戯作調の文芸——言文一致のなかでもなお継続——への
強い忌避感をもっていたのは確かで、この深刻なストーリーの進
行下にはふさわしくないとする感覚である。それが、「話し掛け
た者を悉く忘れて仕舞はうとした」という屈折した意（違！）訳
になったのではないか。いずれにしても強烈な語感の「唾棄・か
みつく」を消去するとなると、前段で強調される嫌悪の情の描写
もできるだけ回避しておいた方がよい。つまり、さりげないマイ
ルド・コンパクト化である。翻訳行為として正道かどうかはとも
かくとして。この続きも見ておこう。改行してこうだ。

いつとなくワシーリエフスキイ、オーストロフの傍のネバ
の枝河の堤へ出ると立留った。
『あッ爰だ——彼奴あの家に住んでゐるン！ 不思議だ！
その前日にかの一條（注〳殺人）を果たして後ラズーミヒン
の許へ行かうと言ったッけが、……、計らず爰まで来ると云ふ
なア、……』と曰て五階に上った。

ラズーミヒンは狭い部屋に立籠り、書き物で暮に忙しさう
であつたが来客の戸を敲く音が耳に入ると起上つて直ぐ戸を
開けた。……途端に顔を見合し、『やッ！ 君か』……（前
掲巻之一、二二七〜八頁）

滅入り込んだ気分であいて、ふと気づくとネバ河の支流に出
会った。この間、外界は彼の網膜に届いていたに違いないが、脳

には達せず意識として認識はしていなかった——言うところの夢うつ状態なのである。ネバの枝河が現実への接点となり、友人ラズーミヒンの姿が認識され、やっと現実界への手がかりとなる。やっと、というのはまだ幻影の続きの可能性があるのだが、すぐ続く『やッ！ 君か』、続く『どうした……病気か？』というラズーミヒンの発声により、聴覚においても現実であることが担保され、最終的に現実が確定するという意識の流れである。さて『にぎりえ』のお力は、横町の闇のなかの「道端の立木へ夢中に寄か、つて」自らの出自と来し方行く末に思いつけているが、ふと「あ、陰気らしい何だとして此様な処に立つて居るのか……」と気づく。闇のなかだけに視覚は作動していない。文はこう続く。「何しに此様な処へ出て来たのか、馬鹿らしい気遣ひみた、我身ながら分らぬ、もうくゝ飯りませうとて闇をば出はなれて夜店の並ぶにぎやかなる小路」へ出る。その夜店の灯りが、ともかくも保証する視覚的現実界だ。魯庵本では小ネバ河からラズーミヒンの住む五階での最上階（つまり現実界）まで百字弱だが、お力の現実界回帰には三百字ほどで書かれた以下のもうワンステップがある。

横町の闇をば出はなれて夜店の並ぶにぎやかなる小路を氣まぎらしにとぶら／＼歩るけば、行かよふ人の顔小さく／＼擦れ違ふ人の顔さへも遙とほくに見るやうに思はれて、我が踏む土のみ一丈も上にあがり居る如く、がや／＼といふ声は聞ゆれど井の底に物を落したる如き響き聞なされて、人の声は、人の声、我が考えは考えと別々に成りて、更に何事にも氣のまぎれる物なく、人立ちおびたゞしき夫婦のあらそひの軒先

などを過ぐるとも、唯我れのみは広野の原の冬枯れを行くやうに、心に止まる物もなく、氣にかゝる景色にも覚えぬは、我れながら酷く逆上て人心のないのにと覺束な氣が狂ひはせぬかと立どまる途端、お力何処へ行くとして肩を打つ人あり。
(五章、三二頁)

浮遊しつつ放射される微弱な電流、そそけだつような皮膚感覚——とでも言えそうな表現力である。肩を打ち声をかけたのは、新たな鼯鼠客となった結城朝之助だ。お力はここで確かに現実界に引き戻される。じつはわたしが『にぎりえ』に『罪と罰』を感じたのは朝之助のラズーミヒン役に気づいたこの場面、この瞬間であった。一葉は明らかに視覚と聴覚の効果を認識している。では、魯庵本には該当部が存在しないこの描写を、一葉にもたらしめたのは何か。それこそ先の「悉く忘れて仕舞はうとした」の意味不明であつたと思う。鋭敏な神経にはいたたまれない不満が生じた。そこから触発されたイメージが意味不明表現を排除し、上記の描写に転生した。みごとに伝統的感性を湛えた表現において、浮遊する主体（霊）の視線には六条御息所のそれがあることをわたしは以前指摘したことがある。

多分、その科白のすぐ後に現れる「計らず爰まで来ると云ふなア」(「ガネット訳」= have I come on purpose or have I simply walked here by chance?) も預かって作用しただろう。それと気づきもしないうちに、つまり夢うつつのうちに、の意である。殺人者はラズーミヒンの五階階てに行き当たり、夢遊状態の一つの層から覚める。それが『アッ爰だ——彼奴あの家に……計らず爰まで来ると云ふ

「なア……」の先掲の百字弱。米川訳では直接該当するこの部分（二二二頁、略）だけで三百字余と長い。件の傍線部だけでも「なかなかおもしろいぞ——おれはわざわざ自分でやって来たのか、それともただ歩いているうちにここへ出てきたのか？ まあ、どうでもいいや」だ。簡略に書いてしまえば確かに魯庵のそれとなる。

魯庵本の中抜き省略の明確な例を示しておく。第一三回（原作第二編第六章）、犯行後何日間か熱病症状だった床で意識を取り戻したラスコーリニコフが、看病する友人らを出し抜いて夕刻の街にさまよい出る場面だ。センナヤ広場を抜けた、女たちが客引きする猥雑な横町。「或いは四十斗り或はやツと十七位で悉く不器量な容貌と黒づんだ眼付の者ばかりだ。『酒手^{さかて}をお恵み下さい』と一人の女は云った。ラスコーリニコフは忽ち五コペック貨を攫出して此女に投付け」（復刻二之巻、五四頁）で通り過ぎる。ここは真ん中がざくりと抜き取られている。話題の亀山郁夫の新訳（平凡社『罪と罰』／は改行）で見える。

四十すぎの女もいれば、十七、八の娘も居て、ほとんどが目もとにあざ（注＝黒づんだ、の意がこれでわかる）を作っていた。／地階から聞こえてくる歌声、床を鳴らす音、騒々しい声に、ラスコーリニコフはなぜかしら惹かれるものを感じた……（略）／「そこのおにいさん、寄ってかない？」女のひとりが、かなり甲高い、まださほどは囁いていない声でたずねた。まだ若く、とくにいやらしい感じもなかった——たむろしている女たちのなかで、ひとりきわだって見えた。

／「へえ、なかなかの美人さんじゃない！」ラスコーリニコフは軽く顔をあげ、女の顔をちらりと見て答えた。／女はにこりと笑みを浮かべた。そのお世辞が、ひどく気に入ったらしい。／「あんただって、かなり男前じゃない」と女は言った。／「まあ、なんて痩せっぽちなんだろ！」別の女が低い声で言った。「病院から出てきたばかりじゃないの」／（略）／「ちよいと、おにいさん！」さっきの女がうしろから叫んだ。／「なに？」／女は口ごもった。／「おにいさんったら、あたしね、あんたならいつでもお相手するわ、でも、いまはね、なんだか変に気が引けちゃってさ。ねえ、あんた、いい人なんでしょう。お酒のみたいんだけど、六コペイカめぐんでくれない！」／ラスコーリニコフは適当に金をつかみだした。五コペイカ銅貨が三枚だった。（三七二～五頁）

わたしはこの亀山訳を読んでいて、『にぎりえ』の一章におけるお力とその朋輩・お高の描写を感じた。もちろん「なかなかの美人さん」であるドゥクリーダがお力、「別の女」がお高。一葉作ではこう描かれる。「中肉の脊^{せいかつかう}恰好^{せいかう}すりつとして、洗髪の大嶋田に新わらのさわやかさ、頸^{えり}もと計^{はかり}の白粉も栄えなく見ゆる天然の色白を、これみよがしに乳のあたりまで胸くつづけて……」お力。「二十の上を七つか十か、引眉毛に作り生際^{はぎぎは}、白粉べつたりとつけて……」お高。ふとこの描写を思い出して、魯庵の該当部分を見て中抜きに気づいたという順だ。魯庵による削除か、ヱ井ゼテリイ杜印行本がすでにそうだったのか。ここは加藤著が指摘する後者の可能性が強いと思う。いずれにしても一葉はラス

コリーニコフとこの女たちとのやりとりを知ることにはなかった。典拠を要するほどのことではないにしても、同一状況の設定が生じているのが面白い。

なお加えておくと、二章（一五頁）でお力は布団の上に置かれた朝之助の財布をとりあげ、「みなの方に祝儀でも遣はしませう」とずんずん引き出し朋輩らに配り出す。男は寛大に見ている。あきたお高が、「力ちゃん大底におしよ」とたしなめる。先の引用に続き、お金をねだるドゥクリーダに対して女たちのひとりが「ほんとにあきれたよ、よくまあ、そんなおねだりができたもんだね！ あたしだったら、恥ずかしくって死んじやいたいくらいなのに……」。三〇前後、あばた面、顔じゅうにあざがある——話しぶりもなじる口調も、おだやかながら真剣そのものだった。むろん魯庵本に不在。その女はソーニャに通ずる存在に違いない。お力の「朋輩」で、こんな仕事をしている自分は息子に合わせる顔がないと嘆く女が、幼い息子を連れて夫・源七のもとを去った十数年後のお初の姿に重ねられていることを、わたしは前拙稿（第一章末尾）で指摘した。優れた作品の共振のようなものを感じる。そして、ラスコリーニコフが入り込んだこの猥雑な横町は、一葉が選んだ最期の住居となる紅灯の町・丸山福山町のイメージにつながっていく。

三 心理状態により別人格を設定

お力につきまとい運命を制することになる男・源七はこう表現されている。「見るかげもなく貧乏して八百屋の裏の小さな家に

まい／＼つぶろの様になつて……色の黒い背の高い不動様の名代」——こんな男が陰鬱な顔で裏道の闇夜を彷徨する。犯行後のラスコリーニコフではないか。魯庵本の冒頭部、「彼は人の注意を曳くに足る男で、背は普通より高くす、らりとして釣合の好い繊弱な質で、濃い鳶色の髪と美しい黒色の眼は中々に際立って見江る」。まだ事件前にしろ、美丈夫である。お力にはもう一人の男ができた。それが結城朝之助だ。「肩巾のありて背のいかにも高き処より、落ついて物をいふ重やかな口ぶり、目つきの凄くて人を射るやうなるも威厳の備はれるかと嬉しく……頸足のくつきりとせし」。わたしは、二人は黒と白で色分けされた同一人物と思っている。源七は「町内で少しは巾もあつた蒲団や」であつた。妻・お初と幼児・太吉がいるが、お力に入れ込んで零落した。巾もあつた蒲団屋時代が結城朝之助なのである。前述のように健気なお初と店の売れない女である「朋輩」も同一人物として重ねられていた。一葉は一組の男と女のそれぞれに、別状態、異なる心境になつた別人を設定している。そのことで運命の転変が鋭く提示される。まさにドストエフスキーがラスコリーニコフとスヴィドリガイロフにおいてしたことである。

年輩ながら美形で紳士然としたこの男、スヴィドリガイロフが「ラスコリーニコフの分身と見ることができるとした荒正人（一九一三七九）の指摘にわたしは胸を突かれた。「スヴィドリガイロフは、ただの卑劣な淫猥漢ではない。心の底にやはり、不思議な良心の燈を燃やしていた。自分が殺した妻や下男の亡霊と、会話までかわしている。だが、作者は、この人物の二面性を掘り下げるよりは、万人に共通する悪の根源を指摘しようとした」。

魯庵本は悪夢のなかで目覚めるラスコーリニコフのベッドわきに、見知らぬ男が立っている所で終わる（第三編の末尾）。夢うつつのなかで「此男年既に若からず、濃い奇麗な髭を生やして」いるのを認識する。一〇分も経過しても物言わぬ相手に堪えられず、「何故何ンにも云はぬ？ 何ンの用だ？」。スヴィトロガイロフは即「狸睡たぬまねをしてエるたアとうに気が付いてた」と応ずる。『罪と罰』後半の背骨となる人物であり、一葉の知るところではなかった存在だ。しかし、重なりあうような心理小説を書いていた。なお結城朝之助のモデルとして、日記に慕情が繁く書かれた朝日新聞小説記者・半井桃水もみづの名が早くからあるが、表面的にはそれだけでいっこうに差し支えないものの、もとより本質的な問題ではない。本質的というなら朝之助がまさにスヴィドリガイロフなのである。一葉はその男を朝之助として造形していた——彫琢不足で毒気は乏しいにしろ。

魯庵は初訳から二一年後の大正二（一九一三）年に改訳版を丸善から出した。その「はしがき」のなかで「悪譯をあの儘にはして置けないやうな気がしたから、舊譯を焚くつもりで新たに改譯を思立つたので、今度の翻譯は拙は矢張拙であつても、二十年前の不完全な舊譯に加筆したのではない。……新たに稿を起したので毫も舊譯を襲踏したのではない」と書く。この改訳版は『内田魯庵全集』（ゆまに書房）にも収録されておらず現在読むのが困難でわたしも通読はしていない。初訳版を収録した同全集第十二卷（一九八四年）に上述の「はしがき」だけが収録された。同巻の編者「解題」のなかで旧・新の異動二百七個所が提示されているが、旧・新版をつき合わせないと具体的な変更全部はわからない。はしがきではこうも書く。「前出版當時二三の評家が原本又は獨譯と照らして誤譯と指摘した數個處の如きは堅く信ずる處があつて誤譯と思はぬから依然英譯に随つて少しも更めなかつた」。我が道を行くの宣言だろう。わたしは可能な何カ所かを確認したが、明らかにようになったところがある。例えば小説の冒頭、「七月上旬……一少年が突進して」これが「……飛出した青年が」と。young man はむしろ新訳でなければならぬ。例の「話し掛けた者を悉く忘れて仕舞はうとした」は、「自分に口を利く者を誰でかまも関はず無視してはふとした」で、確かに分かるようにはなっている。煩をいとわずこの部分の旧・新を併記してみる。

「旧」すると往日むかしの物嫌ひをする根性が募つて来て、周囲のものが何から何まで何も彼も強情に、無上に憎くなつて、話し掛けた者を悉く忘れて仕舞はうとした。

「新」往日むかしからの嫌惡心——人と云ふ人、物と云ふ物、周囲ぐるりのもの一切に対する頑強な苛酷な憎惡心が一層強くなつて、自分に口を利く者を誰でかまも関はず無視してはふとした。

意味不明は自覚していたことがわかる。が、あくまで「つばを吐いて、かみつく」には妥協していない。ヴ井ゼッテリイ社本がロシア語原著にこんなところで逡巡しているとは思えない。魯庵の律義な性格は自ずと滲んでくるところであり、その一方で「英譯に随つて」と書くのも虚言や修辭と思えない。それだけに、この書き直しの確信犯の行為が逆浮上してくるのである。皮肉にも、

その意味不明が一葉の言語感覚の不満を喚起した。それが名作の誕生となる——^{あざな}糾える縄のごとき連鎖である。

改訳版が初訳よりよくなったであろうことは想像できるが、初訳が文学青年らに与えたインパクトにはもはや及ばなかった。この改訳版は二冊本の初訳版を一冊本にしており巻末の奥付には『罪と罰 前編』とある。後編への意図があったことを示しているが、それは成されなかった。野村喬は、英語からの重訳ではない翻訳作業が若い中村白葉によってなされている情報が入っていた可能性があること（翌年から刊行）、そして作業に協力した得難い友人、ロシア文学者でもある二葉亭四迷（一八六四—一九〇九）を死で失ったことを挙げる。

四 『罪と罰』をいつ読んだか

一葉自身は『罪と罰』をどう語っているか。樋口宅訪問者のひとり戸川残花（一八五五—一九二四）が明治二九年一二月、つまり死去翌月の『女学雑誌』に書いたこういう証言がある。自分が「不知庵（魯庵の別号）の罪と罰をかしまひらし、時にはいとく悦ばれ後の日に来られて繰り返しく度度よまれしと云はれぬ¹⁰」。大変な感動である。貸したのがいつで、返して貰ったのがいつか、残花は書いていない。彼が一葉の記述に登場するのは明治二八年一月二〇日¹¹で、毎日新聞（自由民権運動とくに改進黨系の伝統をもつ政論紙、現在の同名紙とは無関係）への寄稿依頼だった（四月に三回連載の『軒もる月』となる）。このときは舞姫などを収めた森鷗外の『水沫集』を「これ見よ」と、つまり『罪と罰』で

はなかった。次は二九年五月二八日の日記に登場。「われに嫁入りの取もちすとて来る。先きは何がしの博士なりといひくる」などで『罪と罰』への言及はない。が、もってきたとしたらこのときだろう。しかし、『にぎりえ』発表は八か月前の二八年九月だから寄与はしてないことになる。次に六月一七日、「残花よりのたのみにて明治女学校建築慈善市に出すべき扇面^{マダ}たにぞく等かきやる」。来訪したわけでなく、便送だろう。そして三回目の登場が七月一七日、「戸川残花ぬしがもとに不沙汰見舞ながらさまぐものなどもらひつる禮にゆく¹²」——これが先の残花の「後の日に来て繰り返し読んだといった」ときの気配がある。借りた『罪と罰』を返しに行ったときである。つまり借りたのは五月二八日しかない。どういうことか。『罪と罰』は既読だったということである。そのときの感動を、初めて読んだように目いっぱい感謝の言葉で伝える。マナーであり、心の真実には違いない。「数度」読んだというなかに前体験が含意されている。それでは初読みはいつだったのか。

一葉日記に内田魯庵のことが見えるのは二五年八月一七日で、友人とのおしゃべりのなかで何人かの小説家の噂話中にその一人の名として「内田不知庵君」とだけ出てくる（『卷之一』の刊行は三か月後の十一月）。熱心な一葉宅訪問者だった戸川秋骨（一八七〇—一九三九）に重要な情報がある。彼は二七年一月三〇日刊の「文学界」第一三号に寄せた「変調論」で魯庵『罪と罰』について熱っぽく次のように論じた。「余は……反狂半病にして世の所謂罪人なるラスコリニコフに思を寄する事深し……世は彼を以て罪人とせり、然れども世の所謂罪人とするは唯其の行為

に於てのみなり、彼の心は青天白日の如く良心の苦しむるなく只他のために己を捧げし事あるのみ、彼を以て罪人とせば天下の大人は皆罪人ならざるべからず……彼が心裡的生命は活動して此の変調を起こさしめ……」。また同じ年九月一日付け島崎藤村の星野天知あて書簡には「先日ハ又、禿（木）、秋（骨）と共に一葉女史の許へ参り、非常に面白き會合に有之……一葉女史尤も「変調論」を愛讀するやにて、實めづらしきすねものと存候」（『藤村全集 第十七卷』三五頁）とあり、一葉の関心ぶりを書き留めた（一葉の日記に藤村は登場しないが訪問は確実）。藤村はその二週前の八月一四日付け平田禿木宛でも「馬場（胡蝶）君の許より『罪與罰』二冊拝借……讀めばよほど悲惨の思致し候」（同三三頁）と。男たちはいずれも「文学界」に一葉自身がすでに主要なその書き手＝同人で、強力な一葉サロン・メンバーである。一葉は『罪と罰』の濃密な空氣のなかにいた。

さて一葉の初読みだが、卷之一が刊行された二五（一八九二年一月一日）のすぐ後のことだろう。この当時、雑誌『都の花』に『うもれ木』を三回にわたり連載中であつた。一月二〇日刊の同誌第九五号、一二月四日刊の第九六号、同一八日の第九七号であり、第一回目の一〇日前に卷之一が出ていたことになる。話は――。若き陶器画工・入江籟三は妹・お蝶と助け合い赤貧のなかに暮らす。鬱々のなかで万国博に出品する金襴陶器に没頭している。ある日、かつて今は亡き師の金を持って逃げた許せぬ弟弟子・篠原辰雄に出会い、激しくなじる。辰雄は姿・言動は紳士然としていた。今は成功して慈善事業に努めているといい、前非をわび制作援助まで申し出る。感動から和解し、お蝶は男に惹かれ

ていく。じつは籟三作を見込んだ詐欺とお蝶を有力者の妾にするのが狙いであることを知る。「今年一八年くもりなき美玉」のお蝶は「寒風ふきしきる夜半の月に、追へども見えず呼べども答へず」姿を消す。一輪の月明のもと、籟三は「天晴斯道の妙の妙」の自作を抱え上げ、「投げ出す一對庭石の上、戛然のひゞき大笑のひゞき」。碎け散る音と片々の金光、そこに虚無的な大笑が重なっていく――。二月一八日、最終回の締めである。

『罪と罰』卷之一で例の瞬間はこう描かれる。「……鉈を取直して真向微塵^{こころ}二度まで打下すと鮮血泉の如く迸^{ほとばし}って死躰はどたりと轉^{ころも}がた。眼球^{めだま}は飛出さんとし顔ハゆがみ……」。ラスコーリニコフは死体から鍵をとり箆^{へら}を物色しようするが、急に体が震えあがり、やめて逃げようとする。が、「今更帰られもしなかつた。斯^かう考へて獨りニタリと笑つた」。

わたしがリアリティーを感じるのは凄惨な殺人描写より、このニタリの方だ。翌夜、奪つて中身も確認していない品物を、先述の小ネバ河わきの路地奥の石の下に埋め込むと、一切の証拠はなくなつたと「再びにッこり」。「此町を歩く中ハ始終長たらしくにた〜と神經的に笑續^{わらつづ}けてゐた」。破局後の、破局を意識しながらの空虚な笑い。「戛然のひゞき大笑のひゞき」はここからのインスピレーションではないか。一葉がいち早く『罪と罰』を読んでいた傍証である。

どこで読んだか。上野図書館に違いない。日記によく出てくる勉強場所である。この時期では一〇月二一日に「図書館に行く……うもれ木原稿料十一円七十五銭」云々の記述があるが、これは卷之一の刊行以前。肝心の一月一日から二月七日までの

間は空白だ。まさに『うもれ木』にかかっていた期間なのである。同時に巻之一を読んでいたのだろう。だから日記には手が回らなかった（『日記』には引きちぎられた形跡を残す余白箇所〓おそらく一葉自身によって〓もあるがここがそうでないのは明か）。もし日記をつけていたとしてもそのことを書くはずない。作品にして書く。作家なのである。空白こそが雄弁に事情を物語っている。とはいえ、『うもれ木』が『罪と罰』に拠って書かれたわけではない。幸田露伴（一八六七—一九四七）の『風流伝』を踏まえている。三年前、露伴二二歳の事実上のデビュー作だ。京の若い彫刻家・珠運が旅路の木曾谷で無頼の義父にいじめられながら花漬^{はなづけ}りをする美しく心優しいお辰と会う。結婚式直前、東京から華族の使者が来て何百円かをお辰を連れ去る。実父は戊辰戦争のとき京で娘と、いまは亡きその母の芸妓（義父の姉）と生き別れ、戦争の功で子爵となった旧志士である、と。珠運はせめてその面影を留めようと今は人住まぬお辰の陋屋にこもり、「厚き檜の大きな古板」に向かう。花綴り麗しく纏った観音の化身像ができる。が、夢に現れるお辰に比べると「身を掩ふ数々の花うるさ」い。飾りを切り落とし、裸形にする。月明の夕刻、薄墨色に暮れの残ったなかに「お辰の白き肌浮き出る如く活々とした姿、朧月夜に真の人を見る様」我が作ながら「ゾッと総身の毛も」立つ思い。思わず右手に鉈を振り上げ……「何の操なきおのれに未練残すべき」。――が、思い乱れてドウと臥した途端、ガタリと何かが倒れかかる。温かい腕が首にからまり、芳しい髪毛が頬をなでる、「彫像が動いたのやら、女が来たのやら……」。夢とも現とも知れず話は終わる。『うもれ木』の籙三が執念を込めた自

作を自ら破壊したのに対して、珠運の方は甘い余情で終わる。

籙三の虚無的な笑いにはラスコーリニコフのニタニタ笑いが鋭く影を落としている。この作以前の初期三作、『闇桜』『たま櫂』『五月雨』はお嬢様・おぼっちゃまの恋心に死の気分をまぶせたセンチメンタリズム臭がとくに濃厚だ（半井桃水の指導下にあり彼主宰の「武蔵野」発表された）。何者かわからない美形の男〓結城朝之助まで生き延びる〓たちに対して、『うもれ木』では生硬ながら執念の男が生まれている。いづれ源七に通ずる存在であり、一葉小説のアイデンティティである執念〓怒りが提示されたのだ。

掲載誌「都の花」には先輩作家で歌塾の友人・田辺花圃（このころ三宅雪嶺と結婚）がとりもつてくれた。露伴作が下敷であることは一葉死去の翌年、森鷗外主宰の雑誌「めざまし草」（明治三〇年三月二八日号）の鷗外・露伴・斎藤緑雨による連載合評「雲中語」で、「露伴子の初作を手本とせるかと思はる、ところ多し」と指摘された。この合評は発言者が特定できないところがあるが（該当分は多分緑雨）、総じて詐欺男・篠原辰雄の描写が不自然であり「未だ発達せざる一葉の作」という手厳しい評だった。ただ先行作があることへの批判がましい発言は全くない。文化とは蓄積であり独自性をどう出すかにある。

『うもれ木』発表から三カ月、明治二六（一八九三）年三月二一日の日記に一高生の平田禿木（^{とくぼく}一八七三—一九四三）の来訪が書かれている。学校から坂を下った菊坂の家である。彼はその一月に北村透谷・島崎藤村らと文芸誌「文学界」を創刊していた。『風流伝』への感動を吐露し、あなたも露伴が好きなんでしょうと語

り、ズバリ遠慮のない若者の問いを発する。「君が『埋木』をこそ見参らせしより、大方はをし計りてなん」と。ねた元はわかってますよ、である。一葉は笑顔で、男の方々の目からは自分の書いたものなどさぞ片腹痛く見えるでしょうがと、こう続ける。「誠に露伴子が本心はしらず、みる目は我が心なれば、其かたはしを見とめて、おのが心に引当てつ、めでまどふや何やしらず」。つまり、露伴さんの奥深い意図はわからないけれど、わたし自身の世界を創っているの、そのことを少しでも認めてもらって、褒めるか不快に思われるかは読む方次第です——だろう。その言やよしである。やりとりを「今の世の作家のうち、幸田ぬしこそいと嬉しきひとなれ」で切り上げる。

一葉文学の成立に露伴作の役割があつたのは間違いない。その露伴作のベースに王朝物語がある。執念を込めた裸形の菩薩像に鉦を振りおろそうとする珠運は、焼かれるわが娘を観察しながら地獄図を描いた『古今著聞集』巻一一の絵師なのであり、後に芥川も『地獄変』を書くことになる。創造と破壊は接しており「狂」が生ずるところ。優れた作家たちが重なるようにそこを描いた。『罪と罰』は『うもれ木』をちらりとかすめる程度だったが、二年半後の『にぎりえ』では深々と影を落とすことになる。

ちなみに破局のニヒルな大笑を前面に出した小品も生まれる。二八年四月の『軒もる月』だ。高位の殿の愛人だったとおぼしき女が今は職工の妻となつて、冷え込む夜の更けるまで働く夫をわびしく待つ。でも、殿のことをふと思ひ出す我は不貞の身。寝かしつけた赤子をわきに、つと葛籠の底に秘した激しい求めの手紙一〇幾通を取り出し読みふける——。「四隣に物おと絶えたるに

霜夜の犬の長吠えずごく、寸隙も風おともなく身に迫りくる寒さもすさまじ……女子はあたりを見廻して高く笑い、手紙を残りにく寸断し炭火の中に投げ込む。『うもれ木』ではまだサラリであつたものが蘊蓄を傾けた描写となっている。その場面を書き込むために前段までの話を作った感さえある。『にぎりえ』発表の五カ月前。主旋律の高まる緊迫感がその習作を思わせる。

禿木の訪問を機に馬場胡蝶・川上眉山・戸川秋骨ら文学青年が次々来訪しサロン状況が生じた。一葉最後の半年間に存在感を印したのが毒舌家の一匹狼・斎藤緑雨（一八六七—一九〇四）だ。面と向かつて「泣きての後の冷笑」と一葉評をしてのけた。住まいは吉原遊廓わきの下谷龍泉寺町（二六年七月）を経て、もとの菊坂に近い新開の紅灯の街・丸山福山町（二七年五月）に移っていた。店裏の離れの建物。そこで『たけくらべ』『にぎりえ』『十三夜』などの代表作が余命一年半の間に書かれることになる。サロン外の迷惑な闊人ファンもあった。母と妹との三人所帯の戸主、生活が双肩にかかっていた。名声が上がつても質屋通いは日常のこと。贅沢には遠いにしろ交際も旺盛だった。

五 魯庵の『にぎりえ』評価

『にぎりえ』は源七とお初の突然の死で、断ち切られたように終わる。ある夕方、お寺の山でのこと。合意の心中とも無理心中とも作者は断定していない。人の噂話で、「切られたは後袈裟、頬先のかすり疵、頸筋の突疵など色々あれども、たしかに逃げる処

を遣られた相違ない、引きかへて男は見事な切腹、蒲団やの時代から左のみの男と思はれなんだがあれこそは死花、ゑらさうに見えた」と語られ、さらに「なにしろ菊の井は大損であらう、彼の子には結構な旦那がついた筈、取にがしては残念であらう」という冗談話もささやかれる。残光冷え冷えである。『罪と罰』は凄惨な老女二人殺人事件が始まり、『にぎりえ』は凄惨な心中？騒動で終えた。ストーリー構成が反転している。留意したいのは、一葉は前半の話、孤独地獄にある殺人者ラスコーリニコフしか知らなかったことだ。

じつは『罪と罰』の後半は基調がまったく異なる。ロマンスなのである。後半の始め（原書第四編四章）で、ラスコーリニコフは罪を娼婦のソーニャに告白し、彼女は殺人者を受け止める——「足にキスをして言つてたわ……言つてたじゃない（そうあの人ははつきり言つた）、君なしでは生きていけないって……ああ、神様！」（亀山訳）。たしかに不気味なスヴィドリガイロフ（ラスコーリニコフの分身）の言動を軸に、危うい綱渡りの心理を味わせられる後半だが、読み手の胸奥にはすでに火が灯されている。「エピソード」はソーニャも追つて来たシベリアの監獄の地を描く。病後、彼は川岸の作業場に出る。ソーニャも病氣だと聞いていた——。「ふと気づくと、かたわらにソーニャが立っていた。彼女はそつと近づいて、彼のとなりに腰をおろした。まだかなり早い時刻で、朝の寒さがのこっていた。彼女はみすばらしい古びたコートをはおり、緑色のショールをかぶっていた。顔はまだ病氣のなごりをとどめ、やせて青白く、やつれた感じがあった。彼女は親しみをこめ、うれしそうにほほ笑みかけたが、それでもさしのべ

たその手は、いつものくせでおどおどしていた」（同）。ハッピーエンドなのである。一葉の方はアンハッピーの傾向が『うもれ木』以後ますます強まっていくなのであり、行き着く先に『にぎりえ』があった。

興味深いのは——あるいは当然ながら——内田魯庵が『にぎりえ』を高く評価したことだ。二八年一〇月号の「国民之友」、つまり発表翌月という素早い時点で同誌に「一葉女子の『にぎりえ』」を寄せ、こう書き出す。「余が近日得たる佳作の中に随一に位すべきは一葉女史の『にぎりえ』とす」。中心論点を現代文にする——。作者の意図は婦徳の意味を十分わきまえている婦人が、残酷な運命の荒波に弄ばれて卑猥な業に落ち込み、心中の悶え苦しみを自虐的なおどけ笑いとだらしなさの演技で表面的に紛らし、一度しかない人生をニセ道徳家に嘲られながら、不幸な最期を遂げる惨劇を描こうとしたもの——。そして「其立案の大膽不敵なるや、恐らくは狭小なる自己の範囲内のみに材料を擇ぶを知る今の小説家が夢寐にも浮ばざりしものなるべし」。社会的な視角の指摘である。以下は後半のロマンスを知る彼がソーニャを意識し、の言と思う。「（お力に対して女性として嫌悪感をもつことこそ当然なのに）却つて多涙なる同情を灑ぎしは（例え全編に多くの欠点があったとしても）猶ほ十分なる称賛を拂ふの価値あるべしと信ず。斯くの如きヒューマニチイに富める作家は今の男性作家中にも多く求むるを得ざるなり」。humanityという語が使われた早い例だろう。

魯庵は厳しい指摘もしている。蒲団や源七との関係の描写も余りに淡泊でお力がなぜこの惨劇にあったか曖昧であり、構成上か

らみれば「源七との関係を正寫して結城朝之助に於けるを影の物語となすこそ普通なるべきに之を顛倒せしは其権衡を失」^(てんとう)っている。この作品に対する核心的な指摘とわたしは思う。ラスコーリニコフでなくスヴィドリガイロフが主人公になってしまっているではないか、とも読める（知る者の優位さがあるにしろ）。一応主役と思われる朝之助は何者とも知れず、同じく何者か分からないながら、源七の残像は強烈である。二人とも極めて抽象的、一葉の異性体験の希薄さでもある。「暗弱庸愚なる白者^(しろもの)が殺人の大罪を犯す弾機として見るべきものは頗る薄弱」という魯庵の指摘は読み手の率直な読後感に違いない。ラスコーリニコフの懊悩の「哲学」⁽¹⁾一つの命と引き換えに何千もの命が救える理想的殺人⁽²⁾など全くないからだ（それが究極のエゴイズムであるにしろ）。ただ、「無数の瑕瑾を発見するを難しとせざるも未来に大作出づる萌芽として見るべきもの」という結びは、大作『罪と罰』の位置からの期待の言であるように映る。魯庵は『にぎりえ』に『罪と罰』を感じていたに違いない。訳者としての密かなる誇らしさが高評価になったとも思える。

高評価は魯庵だけではなかった。むしろどつと賛美が集中し、一葉がまさにビッグな存在となったときである。本人は発表翌月の一〇月、つまり魯庵評が出た同月の日記にこうクールに書く。「やうく世に名をしられ初めてめづらし氣にかしましうもてはやされる、うれしなどいはんはいかにぞや これも唯め（目）の前のけぶりなるべくきのふの我れと何事のちかひかあらん……今の我ミ（身）のかゝる名得つるが如くやがて秋かぜた、んほどはたちまち野末にミかへるものなかるべき運命 あやしうも心

ほそうもある事かな」（日付はないが一〇月初め）。謙虚には違いないこの冷静さが、可愛げがないという印象や、読み手を意識しているとの評を生みかねないところでもある。魯庵の高評は部分引用（魯庵の名は出さず）して書き留めている。別評者の「紫清さりてことし幾百年、とつてかはるべきハ君ぞなどといふもあり」（同月一五―三一日まとめ書き）もさりげなく記す。魯庵について直接語ることとはついになかった。先述の『罪と罰』への感動を戸川残花が書き留めたものがあるだけだ。そこから「これほど反覆して讀んだといふ一葉の方に、本書に關する一言の記録がないのは不思議である」⁽¹³⁾（塩田）という、影響がなかったという文脈で語られる認識も出てくることになる。

日記に書かれなかったから、それがなかったということではない。日記とは、子どものそれはともかく、心の一番奥の一つか二つ手前を書くものではないか（もし書いてしまったら廃棄するかも知れない）。つまり、ないということは逆にそれほど甚大な事柄であつたことの反証でもあり得る。一葉の日記は読み手を意識している。まず家族だが、晩年に行くほど一般読者向け気配を感じさせる。嘘というのではなく、ある種のフリ（それ自体は事実）をするのであり、それ故の面白さも生ずる（荷風の『断腸亭日乗』のような始めから作品として意図された日記もある）。病身の自らの命運を自覚していたに違はなく、後に残せるわずかな現実的な遺産なのである。

哲学者・九鬼周造（一八八八―一九四一）の「書斎漫筆」にこんな言葉がある。「善をも悪をもひとしく客観的に捉えて赤裸々な自己を深刻に投げ出すということは随筆の形においてよりも、

小説の形においてなされる方がむしろ自然ではあるまいか¹⁴。「随筆」を「日記」に換えて読めばいい。九鬼は一般論としていつているのだが、一葉における小説と日記の関わりを核心を突く言葉となつてゐる。心の深奥はドキュメントに適さない。日記にあまりに書き過ぎた桃水は、だから文学的昇華ができなかったのだ。彼にとつての迷惑も生じることになる。

おわりに

『にぎりえ』は明治二八（一八九五）年、その年一月号から雑誌「文学界」で連載を始めたもうひとつの代表作『たけくらべ』を三月号で中断し、博文館の「文芸倶楽部」九月号に一括発表された（『たけくらべ』は八月、十一月、十二月、翌新年号で完結）。「文学界」が後に名をなす人たちが書いているとはいえまだ同人誌的色彩があつたのに比べ、後者は大手の文芸誌だつた。『にぎりえ』に満を持していたことがここからもうかがえる。まさに作家としての絶頂期であつた（日記に空白の多い期間でもある）。

彼女の作品は総じて心に負い目（かなわぬ恋・不倫）をもつ主人公が、それでも誠実に生きようとしながら、背信にあい悲劇的な、あるいは悲運を暗示する流れのなかで——虚無的という表現をわたしはした——終わるといふ共通のストーリー性が指摘できる。しばしば若い死という結末となる。その展開はワンパターンであり生硬にして稚拙とさえいえる。思春期の淡く不器用な恋心を繊細に描いた『たけくらべ』はともかく、他の作品がほぼ忘れ去られたのも故なしとしないのである（擬古文の読み難さだけで

は説明つかないだろう）。『にぎりえ』は小説としてむしろ破調を来しているのだが、そんなレベルを越えたところで（あるいは越えたが故に）読み手をとらえ続けた。作られ方に違いがあるのだ。わたしは前拙稿で「お力」とは一葉の深層に存在する女・夏子（本名）である」という視角から論じた。これは確立した自我においてなせる業なのである。当時としては危険なことであり、もとより覚悟なくしては書けない。それでもなお、わたし自身いぜん釈然としないところがあるなかで出会つたのが、遠い日以来の『罪と罰』であつた。

代表作二作をゼミの学生と読んできたのだが彼女たちの印象は端的に「寂しさ」であつた。これまでその作品は、一葉の境遇に即して語られることが多かったと思う。まず常時経済的窮乏にあつたこと、それと桃水へのかなわぬ恋である（これらは日記で否定しようがない）。しかし、読む側が余りにもそういう現実にとくに生計の窮乏において後の世の感覚に付きすぎていなかったか。つまり、こちら側の感覚を当時に繰り込むという非歴史的な読み（そういう楽しみ方があるにしても）である。平田禿木にこんな回想がある。「女史の貧を強調する者もあるが、女史は決してその中に埋れて、氣を腐らして仕舞つた人ではない。……（下谷龍泉寺町の駄菓子・雑貨店でも）女史も妹の邦子さんも、とても陽気にはしやいで、まめまめしく子供や客をあしらひ、廓通ひの客も車を停めて立ち寄り、袴を抜き捨て、懷中物なども預けていく行くといふ心やすさ……」（復刻『禿木遺響 文学界前後』一二九頁）。「福山町のあの居に於ては、應酬更に流る、やうに、警句は口をついで出て、起居に五分の隙もなく、眞に水の滴れる

やうな客間の取り捌きを見せてゐた。生の酒杯を餘滴なきまで汲み盡したのがこの人である。これがこの生に於ける一大成功でなくて何であらう（一六九頁）。サロンとなった客間では贅沢なものではないにしろふつうに食事が供された。

一方で確かに質屋通いと際どい金策と——。これは近代法的觀念成立以前の民衆世界を考える必要がある。「近世社会においては、民衆の世界を取り倒し、本業（家業）を奪うような「私欲」優先の行為は、領主の公的収奪であれ、地主・高利貸しの私的収奪であり、「不徳」として糾弾された」という牧原憲夫の指摘がある。いわゆるモラル・エコノミーであり、ラスコーリニコフの哲学と通底する。踏み倒しも正統たり得る世界であり、一葉は昂然とそれをなしていた気配がある（『大つごもり』に直接反映）。『罪と罰』とは打てば響く共感関係にあった。

一葉の両親は甲斐の農民で、彼女自身は訪ねていないが郷里との交流は生涯続いた。一葉のみならず、庶民はなお「江戸」に生きる日常だった（小津安二郎の『東京物語』などには戦後においても隣り近所で米・味噌・酒の貸し借りをする風景が描かれている）。鋭角的な近代性が、温もりもあつた共同体性を破壊する前（貧窮下の心豊かさ）である。迫り来る近代を鋭敏に感知する文学的資質が、『罪と罰』との遭遇接触を起し、『うもれ木』への刻印を経て以後の作品を基本的に規定していく。到達点に『にぎりえ』があつた。その寂しさとは近代がもつ病根＝疎外への鋭い洞察である。『罪と罰』前半を抱きしめた「途な作家であつた」。

一葉は「旧派」の評が定着している。後に続く女性たちからその指摘は強く出されている。禿木はこう要約している。「女史は

決して（文学界）同人中の中心にはなつてゐなかつたが……源氏、西鶴など國文學の素養より一步も出ざる女史にして、西歐の詩歌文藝に思ひさま浸つてゐた我々と、斯く互ひに解しあひ、同じ歩みを辿つて行かれたのは、眞に偉としなければならぬ」（前掲七四頁）。ここには「近代の高み」から見下す視線がある。一葉「旧派」の言葉が浮上するところであり、「寂しさ」において再び伝統領域に回収されていく危い地点にはあつた。

彼らは『罪と罰』を論じたが、一葉は作品化した。言文一致という問題もある。この点からいえば古文の一葉は文句なしの旧派である。しかし、言文一致で書かれた旧態依然作をあげるのはさほど難しいことではない。坪内逍遙の『当世書生気質』（明治一八～一九年）も自ら理屈つけた近代小説というには躊躇するところがある。外形的な言語表現形態と、表現された内容の新旧度は単純ではない。

魯庵本に衝撃を受けた青年たちがロシアの歴史・社会的状況を把握していたということはないことは明らかだ。それにも関わらず鋭く反応させたのは、各国・各地域ごとに具体的条件は異なっているが、若い精神を共振させる、まさに普遍的なものが描かれていたからだと思う。あえて共通点を探れば、古い（封建的といつてもいい）体制のなかからの新たな動き——かつて上流階級のみに限られた高等教育のなかに、中間あるいは下層を含む階層が入り出した、そういう状況が生まれた。その地点で明治の日本はロシアと繋がっていたし、より先を行っていたヨーロッパとも連動していた。一葉は発火するように反応し、お力に託して自らの心理を切り刻み、『にぎりえ』を書いた。ヒューマニチイである。男

の描写には届かないところがあつたにしても。読む側も、あまりに魅力的な『日記』の捕縛から身を引き離す必要があるのではないか——普遍的な文学の展開として考えるために。

注

- 1 魯庵は二四歳の明治二五（一八九二）年一月に「巻之一」を、翌年二月に「巻之二」をいずれも内田老鶴圃から刊行した。ただし、巻之二にしても原作の六編構成のうちの第三編までだ。つまり奇怪な人物スヴィドリガイロフがラスコーリニコフの枕頭に立つところで終わっている。原著のちょうど半分まで。魯庵のこの訳本は原作の編・章立て構成の「編」部分を取り去り、章（回で表記）だけで通している。従って原著の構成は第一編七章、第二編七章、第三編六章であるから、最後のスヴィドリガイロフ登場場面は第二〇回であり（原作では第三編六章）、ラスコーリニコフのネバ河畔彷徨部分は第九回（同第二編二章）となる。魯庵自身によるのか、ウ井ゼツテリイ社印行本がすでにそうだったのかは不明。魯庵は大正二（一九一三）年に改訳版を一冊本で出しているが、通しの「回」表記を改めて原作通りの編・章表記とした。いずれにしろ一葉が物語後半を知ることにはなかった。なお二冊本の初訳版が近年、国文学研究資料館から復刻刊行された（平凡社発売）。
- 2 米川訳『世界文学全集18 ドストエーフスキイ 罪と罰』一二〇頁、一九六九年、河出書房新社四六刷。
- 3 Fyodor Dostoyevsky "Crime and Punishment" Translated by Constance Garnett, First published in Eyrman's Library 1911, Last reprinted 1963 London, pp.102.
- 4 Fyodor Dostoyevsky "Crime and Punishment" by David McDuff, Published in Penguin Classics 1991, pp.152.
- 5 『にぎりえ』を読む——「泣きての後の冷笑」を視界に」の五章：「神戸松蔭女子学院大学研究紀要文学部篇No2」所収一三頁、二〇一三年三月以下「前拙稿」と略す。
- 6 前掲世界文学全集巻末の荒正人「解説」、六四七頁。
- 7 半井桃水（一八六〇—一九二六）。対馬藩の医師の子。少年時、釜山の倭館勤務になった父のもとで給仕し朝鮮語を覚える。一五歳で東京の英語学校・共立学舎に入る。一八歳ころから京都・大阪で新聞記者。明治一四（一八八一）年、釜山に渡り朝日新聞の釜山通信員となる。二二年、東京本社の小説記者に。代表作『胡沙吹く風』を二四年一〇月から翌年四月まで一五〇回連載した（一葉は開始半年前の四月に桃水を訪ね、入門、連載中が師事した期間となる）。薩摩藩士・林正九郎が釜山の和館（対馬藩所管）に滞在中、悪県令のために減ばされた郡太守の娘・元子燕の危機を救う。倭館の自室にかくまって子・中元が生まれる。日韓の血を受けた林中元が両国の友好をかけて活躍する物語（近松の『国姓爺合戦』を踏まえている）。二六年始めこれが上下二巻本になって刊行されると桃水は一葉宅を自ら訪ね贈呈する。日記にこうクールな評が書かれた。「桃水うしもとより文章粗にして……みずからも文に勉むる所なく、ひたすら趣向意匠をのみ尊び給ふと見えたり」（二月二三日）。他の個所では持ち上げ評も

しているのだが、この記述が一葉の権威の高まりとともに桃水評価として定着する。ただの通俗作家となる。別の評価が歴史学の方から行われている。上垣外憲一『ある明治人の朝鮮観——半井桃水と日朝関係』（一九九六年、筑摩書房）、全田子『半井桃水の人と文学——『胡沙吹く風』を政治小説として読む』（二〇〇四年二月、「岡山商大論叢」など。徳川政権の友好政策である通信使、とくに正徳元年（一七一二）に日本側で対応した対馬藩の儒学者・雨森芳洲（一六六八—一七五五）の思想的系譜のなかで半井桃水を位置づける。日本・朝鮮・中国が連携して西欧列強の植民地化を避けるという自由民権運動のなかにもあった考え方だ。一葉にはこちらの桃水の姿は全く見えていなかった。朝日新聞記者としての桃水について草薙聡志「半井桃水・小説記者の時代」1—29」（朝日総研レポート No179—207 所収）がある。

8 「卷之一」の三カ月後に出了「卷之二」には卷末に「一」から受けた衝撃を伝える読書評が個人・書誌名で一八本掲載されている。坪内逍遙、山路愛山、巖本善治、依田学海、戸川残花ら。なかでも北村透谷（一八六八—一九四）は二通を寄せ「悲痛、悲惨、幽悽なる心理的小説『罪と罰』は彼の奇怪なる一大巨人（露西亜）の暗黒なる社会の側面を暴露して餘すところなし」、そして「悲哀懊悩の幽暗なる事は『死』の幽暗よりも多きなり」と。自死は一年後のこと。

9 『内田魯庵全集 第十二卷』野村喬「解説」、五七五頁、一九八四年、ゆまに書房。

10 「樋口なつ子ぬしをいたむ」…明治二九年一二月号「女学雑誌」。

誌」。

11 日記とは別の綴りの「しのぶくさ」と名付けられた感想集の明治二八年一月の項に『樋口一葉全集第三卷（下）』七六三頁、一九七八年、筑摩書房。

12 塩田良平は二九年の来訪は「五月二十八日、同六月十七日だけ」（『樋口一葉研究 増補改訂版』五六六頁、一九七九、中央公論社改定四版）と書くが、「七月十七日」もある。

13 塩田前掲同頁。

14 『九鬼周造随筆集』四八頁、二〇一二年八刷り、岩波文庫。

15 復刻『禿木遺響 文学界前後』一九八三年、日本図書センター（原版は昭和一八—一九四三年、四方木書房）。

16 牧原憲夫「政事と徳義」…困民党研究会編『民衆運動の（近代）』所収四一頁、一九九四年、現代企画室。

【文献】

内田魯庵訳、ドストエフスキー『罪と罰 卷之一』明治二五（一九九二）年一月、内田老鶴園刊 『同 卷之二』同二六年二月、同（二〇一二年、国文学研究資料館から各復刻）平凡社発売）

同『罪と罰 前編』大正二（一九一三）年改訂版、丸善

『内田魯庵全集 第三卷回想I』一九八三年、ゆまに書房

『内田魯庵全集 第十二卷翻訳I』一九八四年、ゆまに書房

亀山郁夫訳『罪と罰1、2、3』二〇〇八—九年、光文社古典新訳文庫

米川正夫訳『世界文学全集18 ドストエフスキー 罪と罰』

一九六九年、河出書房新社

加藤百合『明治期露西亜文学翻訳論攷』二〇一二年、東洋書店

上垣外憲一『ある明治人の朝鮮観——半井桃水と日朝関係』

一九九六年、筑摩書房

『九鬼周造随筆集』二〇一二年八刷、岩波文庫

幸田露伴『風流仏・一口剣』一九八八年、岩波文庫

困民党研究会編『民衆運動の〈近代〉』一九九四年、現代企画室

塩田良平『樋口一葉研究 増補改訂版』一九七九、中央公論社改

定四版

島崎藤村『藤村全集第十七卷』一九六八年、筑摩書房

半井桃水『胡沙吹く風』一九九三年、今古堂

樋口一葉『にぎりえ・たけくらべ』二〇一一年第一五刷、岩波文

庫

『樋口一葉全集第一卷（上）小説（上）』一九七四年、筑摩書房

『樋口一葉全集第三卷（上）日記Ⅰ』一九八一年初版第三刷、筑

摩書房

『樋口一葉全集第三卷（下）日記Ⅱ・随筆』一九七八年、筑摩書

房

平田禿木『禿木遺響 文学界前後』一九四三年、四方木書房

（一九八三年、日本図書センター復刻）

Fyodor Dostoyevsky "Crime and Punishment" Translated by Constance Garnett, First published in Everyman's Library 1911, Last reprinted 1963 London

Fyodor Dostoyevsky "Crime and Punishment" by David McDuff, Published in Penguin Classics 1991

内田魯庵「一葉女子の『にぎりえ』」：『国民之友』明治二八年一〇

月

鷗外・露伴ら合評「雲中語」中の「にぎりえ」：雑誌「めざまし草」

明治三〇年二月二二日号（『齋藤緑雨全集卷三』所収二四一頁、

一九九一年、筑摩書房）

同「雲中語」中の「うもれ木」：同、明治三〇年三月二八日号（『齋

藤緑雨全集卷三』所収二六一頁、同）

草薙聡志「半井桃水・小説記者の時代1」29：『朝日総研レポー

ト No179』2017 所収（〇五年四月～〇七年八月、朝日新聞社）

全田子「半井桃水の人と文学——『胡沙吹く風』を政治小説とし

て読む」：『岡山商大論叢』三九卷三号、二〇〇四年二月

戸川安宅（残花）「樋口なつ子ぬしをいたむ」：『女學雑誌』明治

二九年十二月一〇日

戸川秋骨「変調論」：『文学界』明治二七年一月三〇日

木村勲「『にぎりえ』を読む——泣きての後の冷笑」を視界に」：『

神戸松蔭女子学院大学研究紀要文学部篇 No2』二〇一三年三月。

なおこの稿にあった誤植二箇所を訂正する。一頁の「要旨」の

二行目「お力」↓「お初」、一二頁一行目「お初」↓「お力」。

（受付日：二〇一四年一月一〇日）

A comparison between “Nigori-e” and “Crime and Punishment”: The Overlapping Image of O’Riki and Raskolnikov after *the Crime*

KIMURA Isao

Faculty of Letters, Kobe Shoin Women's University

Abstract

樋口一葉は近代日本における最初の職業的女性作家である。しかし、小説としては源氏物語や西鶴など伝統文芸の系譜のなかにあり、もっぱら古文で書いたということもあって旧派とみなされてきた。実際、代表作の『たけくらべ』（一八九五年）や『にぎりえ』（同）は、遊郭や銘酒屋街という前近代的な場所における人間模様を扱ったもので、一見モダンを感じさせるものではない。とりわけ男女の凄惨な死で唐突に終わる『にぎりえ』の評価は、代表作とされながら分かれるところもあった。ストーリー的に無理があるのだが、作品の魅力は疑いなく、すでに古典の地位を得ている。本稿は『にぎりえ』の三年前に内田魯庵により邦訳された『罪と罰』が一葉に与えたインパクトを明らかにする。孤独地獄のラスコーリニコフに重なる虚無的なヒロインお力の検証を通じ、古い言語表現のなかに息づく一葉の先導的なモダニズムを検証する。

HIGUCHI Ichiyoh (1872-96) is the first female author in modern Japan. However she has been considered as a traditionalist under the influence of Murasaki Shikibu or other classic writers and wrote herself only in *Kobun* (archaic writing). “Nigori-e” (1895) is her most important work, which describes the harlot O-Riki’s complexed mental state and her sudden death (maybe murdered!). There has been an argument on the story about it’s defect or not. But even now it attracts many readers and itself has become a classic. Three years before “Nigori-e”, “Crime and Punishment” by Dostoyevsky was translated in Japanese by UCHIDA Roan. I think it gave a shock to Ichiyoh. Lonely O-Riki’s behavior especially overlaps Raskolnikov’s alley wanderings after *the crime*. Through their nihilistic sayings and doing, I will find Ichiyoh’s unexpected modernity in Japanese literature.

キーワード：『うもれ木』、源七、結城朝之助、スヴィドリガイロフ、モラル・エコノミー

Key Words: “Umomore-gi”, Gensichi, Yuuki Tomonosuke, Svidrigailov, Moral Economy

Author’s E-mail Address: isao-ikm@kcn.jp